

群 教 七	G10 - 01
	平26.254集
	道 徳

自己を見つめ、より良い方向に進もうとする 児童を育てる道徳指導の工夫

—自分の考えをノートに書いてからの話し合い活動を通して—

特別研修員 中島 智

I 研究テーマ設定の理由

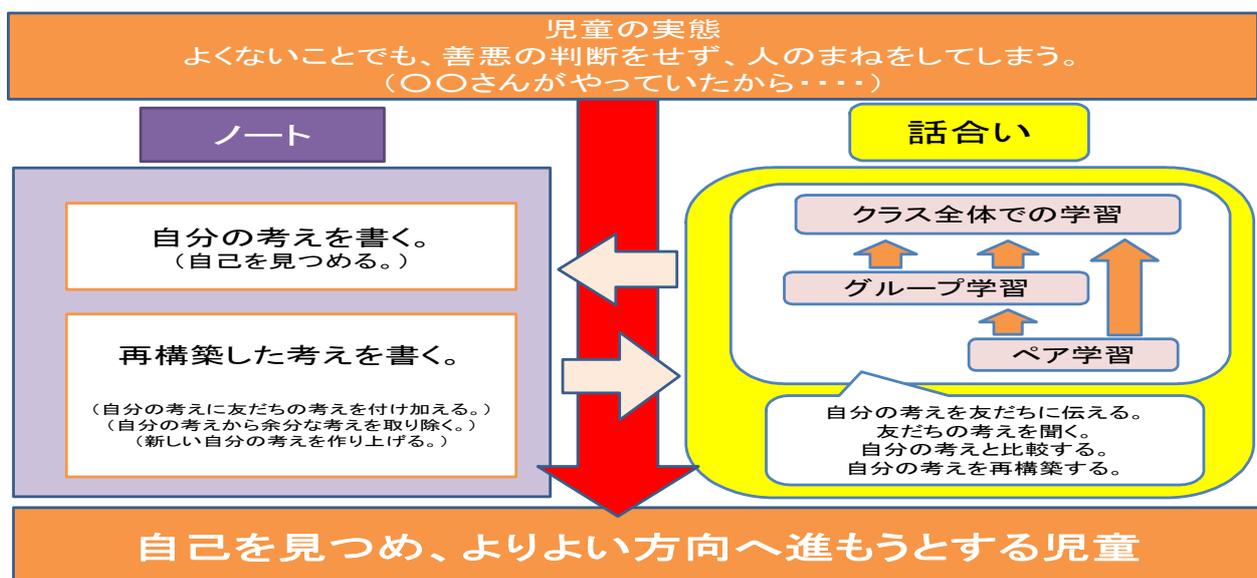
良くないことをしてしまった児童に話を聞いてみると、「自分がしたことは、良いことではないと分かっていた。」と答える。そこで、なぜそうしたのか尋ねると「友達がしていたからしてもいいのかなと思って…」、「友達がやっていて楽しそうだったから…」と答える。頭では「良くないこと」、「やってはいけないこと」と分かっているが、行動は良くない方向に進んでしまう。つまり、道徳的な価値は理解しているが、実践力に結びついていない。そこで、道徳的な価値を理解できている自己を見つめ直し、どのような行動をすればより良い生活をするのができるのかを考え、実行する児童を育てるために以下のような考えを持った。

- ・自分の考えと他人の考えはそれぞれ違う。それぞれの考えを理解した上で、自分で責任を持って行動することが重要である。また、ペア学習・グループ学習での話し合い活動を行うことで、自分の考えと他人の考えを比較したり、新たな気づきを得たり、自分の考えはこれでいいんだと確信したり、相手の考えの方が自分の考えよりよさそうだと思ったりと、自己理解、他者理解を深めていくことができる。
- ・クラス全体で話し合い活動を行うことで、道徳的価値を確認し、児童が自分の進むべきより良い方向へ進んでいけるようにしていく。
- ・自分の考えを持って話し合い活動に参加することで、自分や相手の考えのよさや違いに気付くことができる。自分の考えをノート書くことで自己を見つめることができる。友達の考えを聞いて、考えを再構築しながら自己を見つめる。これらを繰り返すことで、自分の在り方を確認できるようになる。

このことを継続して実践すれば、自己を見つめ、より良い方向へ進もうとする児童を育成できると考え、本主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

(1)実践1における研究上の手立て

○ノート

自分の考えをノートに書く。その後、グループでノートを共有しながら考えを深めていく。

○話し合い活動 【個人→グループ→全体】

まずは個人で「板東さんたちの行った工夫やその理由」を考え、ノートに書かせた。その後、4～5人のグループを作り、グループ学習を行った。そこでは、個人で考えた工夫や理由を一人一人発表し合い、グループでノートを共有しながら意見交流をし、黒板掲示用の紙に意見をまとめた。しかし、制限時間内に、個人の発表→グループの話し合い→発表の準備と行うべき内容が多かったため、児童は「発表できないのでは」という気持ちが強くなり、話し合いよりも発表の準備に力が入ってしまった。そこで実践2では、次のように改善した。

(2)実践2における研究上の手立て

○ノート

自分の考えをノートに書く。その後、ノートを持ち歩きながら友達との交流を繰り返す中で、自分の考えに加除・修正を加えていき、より良い考えへと変化させていく。

○話し合い活動 【個人→ペア→全体】

児童への事前アンケート結果、ジェラル王子、森の番人ガリユ、それぞれが考える自由について確認した。資料を読むと、ジェラル王子よりも森の番人ガリユの考える自由の方がより良い考えということは容易に想像できる。しかし、児童が事前に想像していた自由はジェラル王子の自由に酷似していた。そこで、三つの自由（アンケート、ジェラル、ガリユ）を基に、自由とはどういうものか、自分の考えをノートに書かせた。自分の考えを文章にできる児童もいれば、なかなかできない児童もいる。そこで、「考えがまとまっていない」、「今の段階では分からない」という児童には「？」と書けばいいことにした。これで、全児童が自分の考えをノートに書くことができた。その後、ペア学習を隣の人から、グループ、クラス全体へと交流範囲を徐々に広げていった。ペアなので短時間でたくさんの人と交流ができ、その中で安心感や自信が持てたため、クラス全体で積極的な話し合いができ、授業の終末には、本時の目指す児童像まで近づくことができた。

III 研究のまとめ

1 成果

- 自分の考えをノートに書かせる時間を十分確保したため、ペア学習・グループ学習、全体での学習が充実した。
- 自分の考えを基に交流したため、児童は様々な考えがあることに気付くことができた。
- 自分と他人の考えを比較したため、どの考えが自分や集団が向上するために良いのかを考えることができた。

2 課題

- 自分の考えをノートに記述することができるようになってきたが、ペア学習・グループ学習の時に自分の考えを書き直してしまう児童がいたので、考えが変わった時には付け加えたり、友達のことを追記したりと、ノート活用のルールを設定する必要がある。

3 提言

- ノート活用の更なる改善に向けて、ノートを基にした話し合い活動に、「自分の考え」の変容が分かる書き方を統一する。
- 話し合い活動の更なる改善に向けて、ペア学習・グループ学習の進め方を学習の進め方マニュアルとして作成し、活用することで、児童が安心して自分の考えを話せるクラス環境を整えていく。

<授業実践>

実践 1

- 1 主題名 工夫して新しいことを 内容項目 1 - (5) (第5学年・1学期)
資料名 「ペンギンは水の中を飛ぶ鳥だ」東京書籍

2 資料及び本時について

本資料に登場する旭山動物園の副園長(当時)である板東元さんは、動物たちの習性や生態などを良く知った上で、これまでにない個性的な施設を次々と送り出してきた。ペンギン館を完成させるに当たって「ペンギンは水の中を飛ぶ鳥だ」という発想の基、世界的にも珍しい360度の視界を持った水中トンネルを作り上げる。周りからは無理だと言われても、創意工夫をこらし、積極的に新しい分野を切り開き、夢の実現に向かってひたむきに情熱を傾ける板東さんの生き方について知ることができる。

創意工夫をこらし、積極的に新しい分野を切り開いていく力は、学校生活でも必要な力である。5年生という学年は、家庭科の学習、委員会活動、宿泊学習など、新しい学習から校外の活動まで、幅広く活躍する場が用意されている。そこでは、今まで積み重ねてきた経験を生かし、創意工夫をこらしながら積極的に新しい分野を切り開いていかなければならない。

そこで本時は、これからの生活を、友達との真似をして過ごしていくのではなく、自分で考え、何か工夫をこらし、積極的に挑戦しようとする児童を育てることをねらいとした。

3 授業の実際

【自校の児童が行った工夫を振り返る場面】

普段の生活で、工夫に目を向けて過ごしている児童はほとんどいない。工夫を工夫とは気付かず、過ごしてしまっていることが多い。そこで、「自分の周りにはたくさんの工夫がある!」ということに気付けるよう、学校の中にある張り紙や集会で使われた道具を映像や実物を使って提示した。その時、制作者が行った工夫を考えさせた。児童からは、以下のような工夫が発表された。

映像 (図1)	シール	十字路の廊下に貼られた「危険!止まれ」の大きなシール
	制作者の工夫	目立つ色、配色、字の大きさや太さ、シールの大きさ、貼る場所など
実物 (図2)	大きな字	集会の時、後ろの児童まで見えるように作られた、フラフープに貼り付けられた大きな字
	制作者の工夫	フラフープ、目立つ色、字の大きさや太さ、掲げる高さなど



図1 「危険!止まれ」の大きなシールの映像確認



図2 フラフープに貼り付けられた大きな字の確認

【板東さんたちの行った工夫を考える場面（個人→グループ）】

まずは個人で考え、気付いたことはノートに書く。その時、その工夫をした理由も書かせる。始めは教科書に載っている工夫を書く児童が多かったが、「教科書には載っていないけれど、たぶんこういう工夫もしているだろうな」という考えも認めることを伝えると、今までの学習を参考に、多様な考えをする児童が増えた。

各児童が考える時間を十分確保した後、グループを作り意見交換をすることで、多様な考えに触れることができた。円滑に話し合い活動が進むよう、グループは4～5人の小集団とした。話し合いの進め方は、まず個人で考えた工夫や理由を一人一人発表した。次に、発表された考えを基に、児童同士が質問し合ったり、相手児童にもっと説明を求めたりしながら意見交流をした。話し合い活動が進むにつれて、板東さんの気持ちに寄り添い、他のグループにはない工夫を見付けることができたグループが多かった。

〈児童が考えた教科書に載っていない板東さん工夫の一部〉

- ・一度に大勢の人が水中のペンギンを見ることができるよう、水中トンネルの幅を広く作った。
- ・水中を泳ぐペンギンの上からも見ることができるよう、水中トンネルの下をペンギンが泳げるように作った。
- ・ペンギンが水中で魚を捕まえる様子を見ることができるよう、生きている魚を水槽の中に入れた。

【グループで話し合った結果をクラス全体で交流する場面】

グループで話し合った考えをまとめ、クラス全体での学習に備え、黒板掲示用の紙に書いた。各グループに数枚の紙と人数分のペンを用意し、全員が一斉に書けるようにした。児童はそれぞれ分担をし、協力して書いていた。書く時の注意として、後ろの席の児童でも見やすいように、大きな字で丁寧を書くよう伝えた。

書き終わったら、各グループごとに発表させた。発表後、黒板に掲示し、同じ考えを書いたグループは、発表された紙と一緒に黒板に掲示することとした。この活動を繰り返し、グループで考えた工夫が出尽くすまで続ける予定だったが、予定時間内に発表できなかった工夫は、グループの代表者が黒板に掲示することとなった（図3）。発表しきれなかった工夫は、教師がクラス全体で確認した（図4）。



図3 グループの代表者が黒板に紙を貼る。



図4 黒板に貼った紙をクラス全体で確認

4 考察

- ノートに自分の考えを文章表記できない場合は「？」と書けばいいことを伝えた。「？」の意味を「考えがまとまっていない」、「分からない」という、一つの答えとして認めたため、必ず全員が自分の考えを書くことができた。
- 一人一人がノートに自分の考えを書いているので、グループ学習がスムーズに進行した。そのため、グループ全員が発表し終わった後も時間的に余裕ができ、新たな考えを相談することができた。そのため、他のグループにはない考えを見付けることができた。

実践 2

- 1 主題名 本当の自由とは 内容項目 1 - (3) (第5学年・2学期)
資料名 「うばわれた自由」私たちの道徳

2 資料及び本時について

本資料は「自由とは何か」について考える資料である。ジェラルール王子の考える自由は、「勝手気ままに、したいことをしたいようにできること」であるが、周りから認められず周囲を混乱させ周囲を不幸にする。さらに、周りからの反発にあい、自分も不幸になってしまう。一方、森の番人ガリューの考える自由は、「決まりを守り、周りのことを考える。自分の心を抑え心を正し、自分の勝手なふるまいを慎んだ上で、したいことをする。自由には責任が伴うもの」である。自分の心を抑え、周りのことを考えて決まりを守るため、周囲の混乱や反発もない。周りも自分も幸せになれる。児童の考える自由のイメージは「何でもできるから好き」である。本資料で言うとジェラルール王子に近い。児童に様々な考えの自由を比較して考えさせることで、自己を見つめ、自分がどういう考えを持つことがこれからの生活がより良い方向へ進むのかを考えていく。そして、ねらいとする道徳的価値「自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。」に迫っていった。

3 授業の実際

【三者の考える自由を比較する場面】

まず導入として、児童の事前アンケート結果を発表し確認する(表1)。アンケート内容は「あなたは自由と聞いてどんなことを想像しますか。」である。その後資料を読み、資料中のジェラルール王子と森の番人ガリューの自由とはどういうものかをクラス全体で考えた。「自分たち」、「ジェラルール」、「ガリュー」の三者の自由を見比べた結果、「自分たち」の自由はジェラルール王子に近いということに気付いた。

表1 児童の事前アンケート結果「児童が考えた(想像した)自由」

ジェラルール王子の考える自由	自分のしたいようにする、わがまま勝手な自由。
森の番人ガリューの考える自由	周りのことを考え、自分を律し、責任を持って行動すること
自分たちの考える(想像した)自由	以下の表の通りである。

ジェラルール王子に近い自由(88%)	
・自分がしたいことをする。	・自分の好きにできる。
・好き勝手にしていい。	・何も気にせず好きなことをする。
・何でもできる。何をしてもいい。	・いつどこで何をしても怒られない。
・自分のやりたいことが何でもできる。	・解放された感じ。

ガリューに近い自由(6%)	
・悪いことをしなければ何をしてもいい。	

言葉を想像した自由(6%)	
草原・子ども・楽しい・うれしい・遊ぶ・寝る	

【三者の考える自由を基に、もう一度自由について考える場面(個人)】

「自分たち」、「ジェラルール」、「ガリュー」の三者の考える自由が出そろい、自分たちはジェラルール王子に近いと分かった瞬間から児童は悩み始めた。なぜなら、資料を読むと、ジェラルール王子の自由より森の番人ガリューの自由の方が明らかによさそうだからである。以下、教師と児童のやりとりを示す。

教師：みんなの想像している自由はジェラルール王子の自由に近いから、みんなはジェラルール王子の自由がいいと思っているのだよね。

児童A：今までの流れからいくとそうなるけど…。

児童B：でも何か違うんだよね…。

児童C：わけが分からなくなってきた…。

そこで、「では、もう一度考えてみよう。『自分たち』、『ジェラルール』、『ガリユー』の三者の考える自由を基に、今のあなたの考えを書いてみよう」となった。そこで、児童に、黒板に掲示・板書されている三者の自由を比較しながら、自分のノートに自分の考える自由を書かせた。また、その時に「なぜそう考えたのか」という理由も書かせた。2、3人を除いたほとんどの児童が、ガリユーの考える自由に近い考えを書いていた。

【もう一度考えた自由を基に、ペア学習・話し合い活動を行う場面（ペア・全体）】

自分でもう一度考えた自由を基に、ペア学習をまずは隣の人、次にグループ、最後にクラス全体と、交流範囲を3段階で徐々に広げるように進めていった。ペア学習を進める中で、友達の考えを聞き、自分の考えを持てなかった児童が自分なりの考えを持ったり、自分の考えを持っていたが友達の考えを聞くうちに変化したりした。児童はノートを持ち歩き、ノートを相手に見せ、お互いに説明しながら交流を図った。

自分の考えを文章表記できなかった児童はノートに「？」と書いていた。「？」も自分の考えと認めているが、相手の考えを聞き、納得したり、聞きながら自分の考えを持てたりした時点で、ノートに自分の考えを書き込んでいく姿が見られた。また、自分の考えを文章表記できていた児童も、友達の考えを聞き、新たな考えをノートに付け加えていた。

ペア学習終了後、クラス全体でジェラルール王子派とガリユー派の考えを発表し、確認し合った。考えが出し尽くされた後、各派へ互いに意見交流することで、考えを深めていった（表2）。授業の終末には、全員の児童が「ガリユーの考える自由がいい」という結論になった（図5）。

表2 全体の話合い活動で出された児童の考えの一部

ジェラルール王子派の考え
・自由は何でもできるから自由と言う。
ガリユー派の考え
<ul style="list-style-type: none"> ・自由にしているも周りに迷惑をかけてはいけない。 ・何をしてもいい自由は自由とは言わない。それは自分勝手（わがまま・自己中心的）と言う。 ・何でもいい自由なら犯罪をしてもいいことになる。 ・自由と言っても社会のルールは守らないといけない。 ・みんなが幸せになる自由が本当の自由。

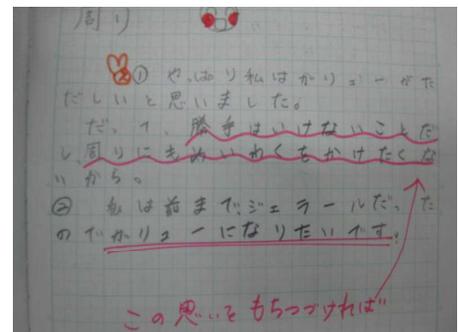


図5 児童のノートより

※話し合い活動後の感想「前はジェラルールだったけど、ガリユーになりたい。」と書かれている。

4 考察

- 児童一人一人が自由についての考えを再構築し、【個人→ペア→全体】と思考の場を徐々に広げて考えたことで、全員が本時のねらいである「自分勝手ではなく、自律的で責任のある行動をした方がよい」という方向に気持ちを向けることができた。
- 本時のねらいである「自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする」の「自律的で責任のある行動をする」に比重がかかると、ジェラルール王子の言うように、自由は「かた苦しい、窮屈」という思いが強くなってしまう。どの児童も自由をプラス思考で捉えていたので「自由を大切にし」の部分の押さえを大切にしていくな必要があると考えられる。